

朝鮮時代の仏画（甘露幀）にみる伝統娯楽の諸相

張 長植

JANG Jangsik

(韓国・国立民俗博物館学芸研究官)

翻訳 林 淑姫

(神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士後期課程)

はじめに

韓国の仏教儀礼に使われる幀画（仏画）の中に、「甘露幀」というものがあります。その中には、民俗の生活様式がよく分かる内容がたくさんあります。

先ず、「甘露幀」についてお話します。「甘露幀」は、衆生の孤魂を盛饌供養を通して極楽往生するための儀礼に架けられる仏画のことです。今までの研究結果によりますと、水陸斎が起源とされます。この仏画の名称はさまざまで、施餓鬼図、盂蘭盆経変相図、靈魂遷度儀式図、甘露王図、甘露図、甘露幀画、甘露幀などと呼ばれています。しかし、私は餓鬼が甘露によって済度・救援されることと、甘露がこの仏画で非常に重要な象徴であることから「甘露幀画」または「甘露幀」とさせていただきます。

今までの甘露幀に関する研究には、図像学的研究、様式変遷に関する研究、風俗的側面からの研究、服飾史研究、そして遷度儀禮に関わる所依經典を明らかにした研究などがあります。私は、その中でも演戯図を取り上げて、その意義を探っていきたいと思います。

1. 甘露幀の構成と下段画の展開

まず、この図像を紹介する意味で、甘露幀の基本構成について説明します。

画面は3段から構成されています（図1）。甘露幀の上段は、天上の世界です。ここでは、祭祀を行う人々と甘露が描かれています。下段には、人間の暮らしの様子を描いており、さまざまな図像があります。そして、下段部分には、衆生のさまざまな死の様子をパノラマ式に配列しています。私は、この図像の下段を中心に説明したいと思います。

現存する甘露幀は、66点が知られています。その中で、下段部分の図像を中心にすると、主題の変化によって時代を区分することが出来ます。

第1期は、16世紀の後半から17世紀の半ばまでです。現存する最古の甘露幀は、日本の薬仙寺が所蔵しているものです（図2）。保存状態があまりよくないので、綺麗に見せられないことが残念です。それから、朝田寺が所蔵しているものがあります。これらは内容が疎略されていますが、以後の甘露幀の基本となります。

第2期は、17世紀の末から18世紀の半ばまでです。甘露幀の図像構図が定着した時期です。しかし、この時期

は二つの形式に分けることができます。その一つは、A形式です。3段の構造が確実に完成された時期です。一方のB形式は、「仙岩寺本（18世紀）」から始まります（図1）。ここでこの作品を「無画記」と称しましたが、図像に関する情報が記録されていないので「無画記」としたものです。甘露を中央に配置して、天上の世界と人間の世界を描いています。私が興味を持っている伝統演戯はここに出ています。

第3期は、18世紀から消滅される19世紀までです。罪を犯すと処罰を受けるという主題が、妓生（芸者）や書堂（寺子屋）などといった庶民生活に関わるものへと変わりました。例えば、宮闕と官衙の主題が市井風俗に変わって登場しています。この下の図像（「龍珠寺本」、1790）がそのようなものを見せていますが（図3）、絵が小さくてよく見えません。このような作品の数は多くありませんが、剥落が激しいです。

2. 下段画の風俗画的性格と演戯

それでは、今日のテーマである下段部分の図像の方へ移らせていただきます。私は、次のように下段画を解釈したいと思います。ここではさまざまな事件によって亡くなった人々を類型化して、死の世界を暗示していると思います。さらに詳しく申し上げますと、「生の中で起こりうる不幸」と、「死に立ち向かう人物像」などを表わしています。通時的に過去から現在、そして未来を提示しています。一言でいいますと、一つの画面に過去と現在、そして未来が共存している方式です。巻物の絵画作品によくみられる「視点移動式構図」とも言えるでしょう。それから、聖と俗が併置されています。僧侶と法事を行う人、仏菩薩と亡者といったように天上の超越的な存在と人間世界の現実的な存在が対比されています（図4）。したがって、私は、この図像が下段から中段、そして上段へと転移するという構成であるために、パノラマ式に読み取る必要だがあると思います（図5）。

それでは、下段の風俗表現について探してみたいと思います。

朝鮮時代の演戯牌（演戯集団）には、次のような人々がいます。男寺党牌、寺党牌、大広大牌、ソッテジャンイペ、チョラニパ、風角匠イ牌、広大牌、乞粒牌、ジュンメグ、などがあります。この図像で見られるこのような演戯牌の演戯の種目は、明確に区分されていません。演戯研究者の結果によると、演戯の種類には、次のような演戯牌の演戯種目に関する表（表1）があります。表の左の方が演戯牌で、右が演戯の種目を指しますが、男寺党牌の綱渡りが寺党牌にも出ているし、広大牌にも出ているし、クツジュンペにも出ているし、大広大牌に「弄丸」というものがありますが、チョラニペにも出ているなど、色々なところにあります（図6、図7）。

したがって、図像では、演戯種目の区分はそれほど大きな意味はないといついでいいでしょう。

● 甘露幀における演戯牌と演戯種目

それでは、種類別の一つずつ見て行きます。

① ソッテジャンイペ

ソッテジャンイペの特技は、ソッテ乗りと綱渡りです。

ソッテ（長竿）乗りは、都盧尋撞、上竿、長竿などとも呼ばれますが、朝田寺の所蔵本（1591）にはじめて登場します。第2期の「亀龍寺本」（1727）には、綱のないソッテ（長竿）で曲芸を行い、その下で弄丸をしています。

す。刺繍博物館の所蔵本（18世紀）には、縄広大とオッリッ広大が楽士の拍子に合わせて漫才をしています（図8）。それから、「龍珠寺（1790）」には、このようにやっぱり話し合っていますね（図9）。特に、ここでは逆立ちをして笛を吹いています。これは漫才をするというより、この人を誉めるなど、観客の目を引きつけようとしています。

それから、「綱渡り」についてお話します。綱渡りは、踏索戯、踏索、走索、戯繩、履繩などと、色んな名前でも呼ばれています。高麗時代に李穡（1328～1396）によって著された『驅儼行』にも、綱渡りが登場します。また、朝鮮時代の成俔（1439～1504）が書いた『観儼戯』にも4つの種目、すなわち弄丸、傀儡戯、歩索、長竿戯が登場します。「弄丸眞似宜僚巧（神妙な鐘遊びは宜僚の技のように）」があり、「歩索還同飛燕輕（綱を渡る姿は飛燕のように素早い）」があります。この「弄丸」と「歩索」が正にそれです。そして、「小室四旁藏傀儡（四つの壁を囲んだ狭い部屋であやつり人形を遊ばせ）」、「長竿百尺舞壺航（百尺のソッテの上で杯をとって踊る）」では、「傀儡」と「長竿」が出ています。

綱渡りは、18世紀の甘露幀の主なモチーフです。さまざまな作品に欠かさず登場します。「雲興寺本」(1730)は、右側で綱渡りをしています（図10）。「仙岩寺本」(1736)は、綱渡りと竿の上で逆立ちをしています（図11）。「鳳端庵本」(1759)は、綱を渡りながら笛を吹いています（図12）。後でも申し上げるつもりですが、この人はボールを投げて受け取る練習をしています。他の作例を見ても、このような典型的な図柄がたくさん見受けられます。これは、先ほど見た図像です。おそらく、漫才をしていると思われます（図13）。「龍珠寺（1790）」には、綱に吊られて笛を吹く場面がとても典型的に現れています（図14）。それから、「守国寺本」(1832)には、仮面を被ってチャング（鼓）を肩にかけて長竿に登る人も描かれています。韓国ではこの人を「チョラニ」と呼びますが、行動が軽い人を「チョラニ」とも言います。綱渡りは、主に双綱（2本）渡りがよく出ています（図15、図16）。演戯者の話によると、双綱（2本）より、一本の綱が渡りやすいと言います。現在もこのように綱を渡っています。しかし、一本の綱で渡っています（図17）。

それから、逆立ちする場面も多く出ています。「青龍寺本」(1898)と「白蓮寺本」(1899)を見ても同じです。（図18、図19）

② 寺党牌

次に「寺党牌」が登場する作例を見ることにします。

朝鮮時代の寺党牌は、主に女性の「寺党」を先に立たせて演戯を行った集団です。寺党牌と推定される図像が、「青龍寺本」(1682)に出っていますが（図20）、「双磎寺本」(1728)を見たいと思います（図21）。この人々は、放浪しながら芸を売り、売春もやりました。「刺繍博物館本」(18世紀)には、踊る寺党と4人の居士（差配する男）が演奏する場面まで現れています。19世紀の甘露幀（「仙岩寺本」、「普光寺本」(図23)、「大興寺本」、「円通庵本」）には、この居士と思われる男性たちが小鼓を演奏していることから、寺党牌が変化していたと考えられます。そして、このように旅をしながら見物人が売春を希望すると体を売ってお金を稼ぎました。

③ 弄丸

「弄丸」は、韓中日の三国で流行ったものだと思います。

中国でも流行ったし、韓国でも、日本でも流行りました。特に、高句麗の水山里古墳（5世紀）の壁画に、この遊びが登場します（図24）。この人は今「ソッテ（長竿 乗り）」をしています。日本にも色々な図像が残っています。特に、「信西古楽図」では美しい女性が綱の上で弄丸をしています。亀龍寺の所蔵本（1727）には、弄丸をする姿と舞童がとんぼ返りをしている姿があります。やはり、この図像でも剥落が激しくあまり見えませんが、弄丸の様子がよく現れています（図25）。

そして、この「弄丸」は、よく「ソッテジャンイペ」と一緒に登場します。ソッテジャンイペが弄丸を主なレパートリーとして使ったように思われます。その中で、この弄丸の横で踊っている人が登場するのは、ソッテジャンイペの公演が一定のレパートリーを持って構成されていたことを意味します。ここ「雲興寺本」(1730)には、ソッテ（長竿）に登って逆立ちをしており、その下の人は弄丸をしています（図26）。「大興寺本」(1901)も同じく行っており、踊っている人が横に立っています（図27）。ご参考として申し上げますと、これは韓国の巫女がクッ（儀式）を行っている場面です。これは、今後の私の研究課題の一つでもあります。つまり、これらの演劇が民衆の愛護を受けていたと、私は思います。

④ 傀儡

それから、「傀儡」についてお話しします。

大体、男寺党牌は、寺院の創建や開創の仏事のために乞粒（托鉢）集団を組織して演劇を行ったことから由来したと言われます。18世紀に制作された湖岩美術館の所蔵本にはじめて登場しました（図28）。四角の箱に幕を張り、その中に入って人形遊びをするものです。今の韓国にもこのような遊びはありますが、甘露幀の中には、傀儡の図像は「湖岩美術館本」だけに現れています。甘露幀の主な素材ではなかったようです。

⑤ 個人的遊び

その他に、個人的に行われる遊びについてお話しします。囲碁、将棋、双六などがあります。まず、囲碁について見ます。この（青龍寺本、1682）左を見ると、二人が囲碁を打っている姿があります（図29）。その周りには2人の人が見物をしています。

それから、将棋を見ると、「双磎寺本」(1728)に小さく見えます（図30）。加えて申し上げますと、画面のあちこちに争う人や老人など、色々な人が登場しています。これは牛が引く荷車です。将棋は、両班の遊びから庶民の娯楽へと変わったのではないかと推測されます。

そして、双六についてお話しします。「新興寺本」(1768)の人は、双六をする途中で何かに怒り、双六盤をひっくり返しました（図31）。それで、この人はその様子を見ています。双六は、一般庶民の遊びというより、両班家、特に女性の遊びだったと言われます。特に、1960年代まで、韓国の南部地方では嫁入り道具の一つとして双六盤一式を持参したとされます。しかし、この図像では、男たちが楽しんでいます。それが違うところです。

⑥ 下段画の傍題「解愁楽土」

下段画のタイトルとも言える傍題（サブタイトル）があります。その中で、私は「解愁楽土」に注目したいと思います（図32）。直訳すると、「愁いを解く楽土」という意味です。しかし、ある図像には、「解愁楽死（愁いを解き、楽しんでから死ぬ）」と書かれ、「死」の文字が異なっています。もちろん、間違った表記もあると思い

ますが、「愁いを解き、楽しく暮らして死を迎える」という意味で解釈すると間違いでないようにも思われます。参考までに申し上げますと、この仏画の制作者は、僧侶の中でも絵を描くことを専門とする「金魚」という人々です。この人々は相当なインテリなので、文字を間違えて書くことはないと思います。したがって、誤字とも見える文字の意味を読み取ることが必要だと思います。結局、人生とは、愁いを解き、暮らしを楽しんで死を迎えることではないでしょうか。また、「解愁」という言葉は、湖南地方（全羅道）にある「乞粒牌」を意味する隠語でもあり、その中でも特に芸者を意味しています。したがって、これらの集団は売春と関係を持つ流浪芸人だったと推測されます。

3. 結論にかえて

最後に、結論にかえてお話しします。

全体的に甘露幀の下段画には、「聖と俗」が対比され、「生と死」が対比されます。そして、「過去と現在と未来」が対比されています。多種多様な事件により、多くの人々が死ぬという人間の姿を暗示しています。その死も「既に完了した死」「今進行している死」、そして「これから向かえる死」です。これは、時空を越えて「起こりうる死」「その死に関わる人間」を提示しています。結局、甘露を通して六道衆生の救援、つまり済度を提示している図像であると言えます。

ここで、私の結論を申し上げますと、第一に、甘露幀における演戯牌の登場は、当代の桎梏に処した民衆の姿であり、結局、甘露幀を通して済度に至るという浪漫的幻想を提示していることです。これは、朝鮮時代の大乘仏教が用いた教化の一つの方便として活用されたと見られます。第二に、寺院の庇護下で活動した寺堂牌たちがどのように歴史的展開を経てきたかに関わる内容です。このような図様を甘露幀に描き入れることで寺院が身分の低い存在まで包括的に関心を抱いていたという宣言でもあります。

したがって、甘露幀は、どの仏画よりも民を重視するものであり、身分と階級を越えて人間の問題を取り扱っていたものと見られます。これは、すなわち朝鮮時代の仏教が抑仏崇儒（仏教を抑えて儒教を崇める）という国家の政策に向かって対応できるという論理の一つではなかったのでしょうか。

それでは、以上で発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

図版



図1 「仙岩寺本」(18世紀)

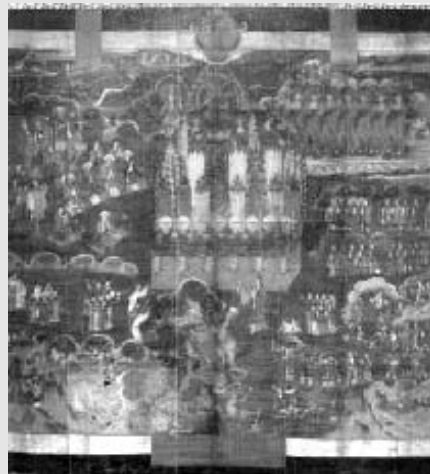


図2 「菓仙寺本」(1589)



図3 「龍珠寺本」(1790)



図4 「湖岩美術館本」(18世紀)



図5 「三角山青龍寺本」(1898)



図6 「雲興寺本」(1730)



図7 「国立中央博物館本」(18世紀)

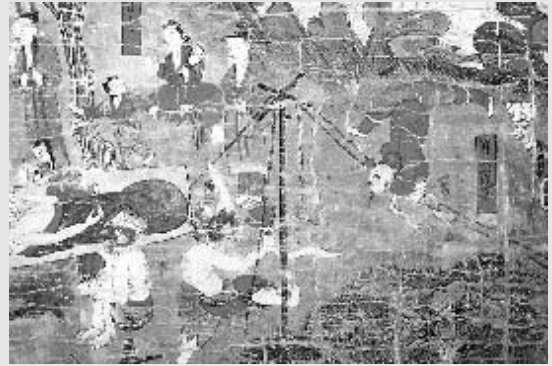


図8 「刺繍博物館本」(18世紀)



図9 「龍珠寺本」(1790)



図10 「雲興寺本」(1780)



図11 「仙岩寺本」(1736)



図12 「鳳端庵寺本」(1759)



図13 「刺繍博物館本」(18世紀)



図14 「龍珠寺本」(1790)



図15 「守国寺本」(1832)



図16 「興国寺本」(1868)



図17 今日の綱渡り



図18 「青龍寺本」(1898)



図19 「白蓮寺本」(1899)



図20 「青龍寺本」(1682)



図21 「双磎寺本」(1728)



図22 「普光寺本」(1893)



図23 「普光寺本」(1893)



図24 水山里古墳壁画 高句麗時代（5世紀）



图25 「龜龍寺本」(1727)



图26 「雲興寺本」(1730)



图27 「大興寺本」(1901)

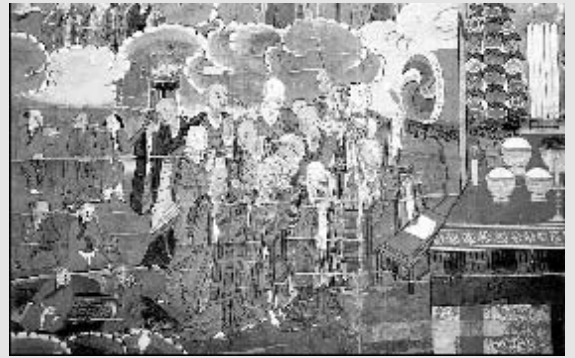


图28 「青龍寺本」(1682)



图29 「青龍寺本」(1682)



图30 「双碛寺本」(1728)



図31 「新興寺本」(1768)



図32 「刺繍博物館本」(18世紀)

表1 演戲牌の演戲種目

演戲牌	演戲種目
男寺党牌	風物、バナ（平鉢回し）、サルパン（筋斗）、オルム（縄乗り）、ドッベギ（仮面劇）、ドルミ（人形劇）
寺党牌	サタン小鼓踊り、ソリパン、縄乗り
大広大牌	農楽、舞童、弄丸、ソッテ乗り、五広大仮面劇
チョラニペ	風物、オルン（幻術）、弄丸、ソッテ遊び、仮面劇
風角匠イ牌	パンソリ、洞簫、鼓、伽倻琴、剣舞
広大牌	三絃六角、パンソリ、民謡唱、舞踊、縄乗り
クッジュンベ	風物、バナ、筋斗、縄乗り、ビナリ（徳談）